

おやをまつ

発行・古平町史編纂委員会
編集・古平町史編纂室
第二十一号（一日発行）
—平成三年六月一日—

明治初期の古平の農業

近 藤 廿方 一

この古平平野の成因については、古い歴史がある。

現在の国道の古平川から古平町役場のあたりまでは、比較的新しい砂丘である。従ってこの国道と両側の家は砂丘にのっていることになる。この国道がのっている砂丘と平行して、数百米離れて、山側にもう一本の砂丘があったと推定されている。（現在は消滅している）

縄文時代の早期から前期（5000年～6000年前）に氷河期が終わり、地球が温暖になった。そこで海面は5～6米ほど上昇している。現在の古平平野の相当奥まで海で、このころ古平川が流す土砂が波と沿岸流に運ば

な古平平野を完成させたのである。まさに母なる川である。

さて古平で農業を専業とした人達は、何年頃から定着したのか。このことについてはほとんど記録が残っていないが、現在最も古いとされている記録として、明治三年『古平役所本陣兼人員並給料見込』に本陣の使用人として、帳役一人、通辞一人、手代三人、小使二人、給仕一人、料理方一人、飯焚一人、畑夫一人、計十一人の使用人がいて、そのうちの『畑夫』が、いわば古平の農業専業者の第一号ではないか。

運上家（本陣）は、役人出張

【△7日は、こんな日】

古平中学校校舎「第一期工事」落成式

生徒の熱望と町民の期待をこめて盛大な祝典行事 昭和2年

新学制により小学校の間借り教室でスタートはしたものの、一人用の机に二人が向かい合っ

て座り、生徒が増えると教室が足りなくなり、ついに二部授業

の宿舍となる。また、特別な旅行者には食事を提供しなれないという事情もあった。そのため、専業の『畑夫』がいて、本陣の付近で数百坪の畑地を耕していた事が記録にある。「新古畑地坪数書上」によると、字チヨヘタンの400坪に運上家の畑が含まれている。

明治7年に、二人の農業者が古平に入っている。

— つづく —

の「すし詰め学級」となった。伸び伸びと学べる独立校舎の建設こそは、教職員・生徒、そして町民の希望であった。

だが折悪しく、二十四年には壊滅的な大火に見舞われ、町はその復興のさなかにあった。

当時、就任間もない伊藤町長は、「古平中学校の建設には、町税の二倍を越え、町予算の半分にも当たる建設費を要するが、人材の育成こそ町百年の大計である」との文書を町内全戸に配布し、町民へ支持と協力を訴えた。（三ページ下段へ）

思い出す 今は亡き

悪ガキ連の顔、顔

ときどき、古平小学校の同窓会名簿を見ることがある。下手な小説を読むより、このストーリーのない、ただの印刷した人名簿がなんと懐かしいことか。少しばかり製作に関係した一人として、なおさら思い出の尽きないものがある。私にとって



も、自分の歩んだ過去のドラマがよみがえって来る。

当然のことながら、『死亡』という注記を目にする時はドキッ！とする。だがそれがクラスが悪ガキ連？ だったりすると、その一人一人の顔が浮かんで来る。

どうも優秀な、個性豊かなヤツほど早く死んでしまったようで、現在残っている私ごときは

余され者の役立たずか、アッハハハ——。

松田長吾君も私同様の暴れん坊の代表格であったが、なぜか人気者であった。背が低かったので、机は一番前だったが、よく先生になぐられていた。彼はトUNCHがいいので、鉛筆を握りしめて、その手を頭の上にあげていた。先生はいつものとおり頭に向かって「ゴツン」とやっただ。そしたら、先生の顔が一瞬

ゆがんで、「ああっ、痛ててて

の席だったのでビックリした。

先生の手に鉛筆の芯がささったのだ。それ以来、松田君はなぐられなかった。めでたし、めでたしである。

彼は卒業後漁師になり、その後一流の船頭になった。彼独特のほっ被りをして、時々、私と漫才調の立ち話をしては、憎ま

れ口をたたいてた。

ことに船に弱い私としては、何故か彼が偉大な男に見えて、一目も二目もおかざるを得なかった。スポーツという大監督だったんだよなあ。まことに惜しい奴を失ったものだ。

大正六年、町ではガソリンポンプ一台を二千二百円で購入したが、この代金の半分は、大口の寄付金によるものであった。

当時は人力による腕用ポンプが主力で、珍しい蒸気ポンプもあったというが、釜を焚いて蒸気を出すのに時間と手間がかかり、どうも実用的では無かったようである。

また、せっかく購入した新鋭ガソリンポンプも、八年の浜町の大火に故障してから、解体修理をしたが調子が悪く、機械の取り扱いに不慣れなこともあってなにか厄介者扱いであった。十二年になって処分される

彼のことは、長吾とは呼ばずに、「チョゴ、チョゴ」と呼んでたのを思い出す。

誰からも愛された、今は亡き彼のご冥福と、ご遺族のご多幸をお祈りいたします。

つづく

ことになったが、予備としてそのまま命をつないでいた。しかし、昭和二年ついに廃棄処分されることになった。

その時、消防手・山本清吉、小頭・本間金三郎の二人が、このガソリンポンプを廃棄にするに忍びず、四十日もかけて、しかも無報酬でこれを修理をした。

町会（町議会）ではこの善意に対し、二人に記念品を贈ってその労に報いたのである。

こうして生き返ったこのガソリンポンプは、昭和十二年、新しいガソリンポンプが寄贈されるまで、現存していたのである。

ポンコツのガソリンポンプを 二人の消防手が無償で修理

随筆

古平 (二)

早飯・早糞

土口 川 荻我 雄雄



私が十代の時の奉公先でも、二十歳代の海軍でも、「早めし、早くそ」ということをよく言われた。

私はこの二つとも全く駄目だった。漁師の倅でありながら、魚を食うとなると、血わたのあらハラスから遠く離れた部分を丹念にホジクリ返して、「モツタイない」食べ方だけは避けようとしたから、親父が、「お前は坊主になれ」と言うほどトロくさい食事となる。それに反して、妹や弟たちは魚の目玉までほおぼる芸当をやっているから、私のとろくさが際立って見えるのである。

他人の飯を食っていた奉公先だつて似たようなもの、煮豆は家にいた時から皿までなめてい

たから、当たり前のようにペロペロと丹念にやったからたまらない。食堂中が笑いの渦になった。

「早くそ」は自信が無いわけではないが、古平の我が家は活字が常に欠乏していたので、キンかくしにつかまっていた時から、目の前の箱に入っている落として紙が貴重な知識源になる。

大正時代 《安かった労働賃金》 一日働いて米三升

今は好景気でどこも人手不足だというのが、働きたくても仕事にありつけなかった時代、特にデメンという日雇の賃金は低かった。大正六年、男で七十五銭（女はその五ノ六割）の時、古平の鯉漁場では一円二十銭であ

落とし紙は四角な短編小説だから、その続きを求めて箱の中を掻き廻し、便所から出て来る時は大抵膝の関節が痛くなっているくらいだから、こちらの方も親の溜め息となった。

軍隊となると、シャバの慣習は一切通用しない。飯に汁をかけるのではなく、汁椀の中に飯をぶち込むし、息抜きのつもりで便所に逃げ込んでも、忽ち追手がドアをド突きに来る。

お陰様で「早飯、早糞」はお手のものになってしまったが、何となくのんびりとした生活に慣れて来ると、もう一度言われてみたいような気もする。

(つづく)

(一ページより)当初は、木造二階建ての設計で既に工事契約が終わっていたが、鉄筋コンクリート建設の補助が決まり、再契約をした。

敷地の整地作業には、生徒会のほか児童会も自発的に参加を申し出、PTA会員や校下住民等が汗の奉仕をした。町内からの寄付も三百七十万円になり、財政に大きく貢献した。

建設工事には小樽市の金子組が当たり、着工以来十一月、総工費二千八百四十三万九千円をかけ、二十七年六月二十日竣工をみた。二階建て、一部鉄筋コンクリート三階建てという堂々たる校舎が古平河畔に姿を現したのである。生徒はもち論、町民にとつても大きな感激であった。

六月二十八日、夏の日差しを浴びて新校舎を正面に、落成式と、併せて創立五周年記念式が盛大に行われたのである。

往時のことを知り、四十年の歳月を経た校舎を見ると、誰しもひとしおの愛着があろう。

昔のあそび

「手まり唄」

(一)

池田 テル

先日、『せたかむい』を目にして、いろいろと昔のことを懐かしく思い出しました。

私たちが子どものころ、女の子が四季を通じて楽しく遊んだものに「毬（まり）つき」がありました。

着物を着て、大胆に手足を振つての「まりつき」は後のことで、そのころは、学校の運動場の片隅や、家の中の板の間で、また外に蒔（むしろ）を敷いてやりました。

仲良しが車座になり、ジャンケンで勝った順から始め、あとの人が声を揃えて「手毬唄」を歌ったものでした。

その当時のことを思い出しながら、懐かしい思いにひとり歌ってみたのですが、歌詞でどうしても思い出せないところがある

ります。同年配の方に聞いてみたのですが、まだ分かっていません。知っている方がおられましたら、ぜひ教えてください。

「イヤドンドの手鞠唄」

ドンドンハ イ（一の意味）

ヤドンド

ドンドンハニ（二）ヤドンド

ドンドンハサ（三）ヤドンド

ドンドンハシ（四）ヤドンド

ドンドンハゴ（五）ヨ

アガリ（上がり）

大正時代までの鯀を除く各種漁業

—— 漁法と魚族の移り亦あり ——

① 建網、手釣りで漁獲

サケ、マス、ブリ、マグロ

ホッケ、フグ、タナゴ、ハ

タハタ、イワシ、コナゴ

② 刺網、手繰網、底刺網で漁獲

（底刺網は延二年初めて使用）

③ 釣、サケ、マス、ブリ、マグロ

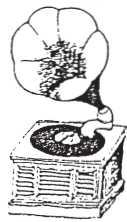
ホッケ、フグ、タナゴ、ハ

タハタ、イワシ、コナゴ

④ 縄釣、竿釣で漁獲

「ゴムまりが使われる前は、布切れで作った手毬で、それを上にはおり上げ、落とさないで何回続けるかを競った。ゴムまりが出来てからは、まりがよくはずむので、地面について遊ぶようになった。『イヤドンドの手鞠唄』は、開拓当時から流行し始め、歌いやすく、歌詞が単純であったため、急速に全道に広まったと言われている。」

つづく



タラ、スケソ、アユ
(2) 来遊する魚族の移り変わり

明治以前は、鯀漁業のほかに、サケ、マス、タラ、ホッケ、フグ、アワビ、ナマコを商品として漁獲し、一定の運上金を納めていたが、その他の魚介類は単に自家用の食糧とするだけで、販売するようなことはなかった。そのころは、どのような魚族が漁獲されていたのかはつきりしていないが、明治初年からの各種魚族の来遊の様子については、おおよそ推察することができる。

一、サケの漁獲は多く、古平川に遡上するものを河口で捕獲していた。

二、タラは、明治二年前から、新潟県や山形県地方から移住して来た人たちが漁獲していた。明治十五年前ごろが最も盛んで、豊漁であったが、大正になりその場所が遠洋（海岸から三十里）に移り、漁が減退しているばかりでなく、危険にもなってきた。—— つづく ——